

旧約聖書の原典をたずねて

大 島 力

『聖書の原典をたずねて〈旧約聖書編〉』ということでお話をいたします。しかし、「旧約聖書」という名称そのものが、もうすでに、ある特定の立場に立つ名称であります。キリスト教の立場に立って旧約聖書と言っています。ユダヤ教とキリスト教は、旧約聖書の部分を共有しております。とりわけ、プロテスタント教会が正典としている旧約聖書は、ユダヤ教が聖書としている部分とまったく同一であります。ですから、例えば、国際旧約学会等に行きますと、「旧約聖書」という言い方は、ほとんどされずに、旧約学会であるにもかかわらず、「ヘブライ語聖書」というような言い方がされます。それはその場にユダヤ教の学者たちがいるからでありまして、旧約というのは、もちろん新約があつての旧約ですので、同じ土俵に立って議論をする場合、ヘブライ語聖書と言うのが中立的であるという理由からであります。

なぜ、ヘブライ語聖書というかと言うと、もちろん、ヘブライ語という文字で書かれているからです。そのときに、それでは新約聖書を何と言うかということですが、それに対応する言葉としては「ギリシア語聖書」と言うことがあります。ですから、旧約聖書と言ったり、ヘブライ語聖書と言ったり、あるいは、あとで少し述べますが「マソラ本文」と言ったり、いろいろな言い方をいたしますが、大体同じことを指していると理解していただければ結構だと思います。

I. 旧約聖書の三分

旧約聖書は大きく三つに分かれています。現在、私たちが日本語の翻訳などで持っている聖書の順番と、ヘブライ語聖書、ヘブライ語原典の順番は違っておりまして、まずはこの原典のほうの話をいたします。三つの区分がなされています。

「トーラー（律法）」、「ネビイーム（預言者）」、そして「ケトゥービーム（諸書）」と言います。「律法、預言者、そして諸書」と、このようにヘブライ語の原典では区別されております。さらに預言者の部分を二つに分けて、「前の預言者」、「後の預言者」という言い方もいたします。

また、トーラーのTと、ネビイームのNと、ケトゥービームのKという頭文字をとって、TaNaKと書き、ユダヤ教の立場の人たちはよく「タナック」とヘブライ語聖書の部分を呼びます。これはトーラー、ネビイーム、そしてケトゥービームという三つの部分からなっている書物であるということ、きちっと表示している、あるいはそういった用語を使っているということでもあります。そこに旧約聖書の39の文書が区分されて納められています。

この律法、預言者、諸書という順番ですが、これは正典化の順番であるということは確かであります。もちろん、歴史的な研究があつて、正典としての旧約聖書の成立というのはいろいろな問題がありますが、まずトーラーの部分が閉じられ、そして、預言者の部分が閉じられ、最後に諸書の部分が最終的に閉じられて旧約聖書が成り立ったという、その歴史的な順番は疑われてはおりません。

年代的にいつごろから旧約聖書の文書が書き始められたか。これははっきりとはいたしません、大体、出エジプトの時期くらいから口伝の形で残され、本格的な文書化はダビデ・ソロモン時代であると言われております。しかし、トーラーの部分がいつごろ確定し、閉じられたかということ、かなり後の時代になります。それはバビロン捕囚が終わりまして、しばらく経ってペルシャ時代、紀元前の五世紀から四世紀ぐらいに最終的に確定し閉じられたと考えられてい

ます。これはエズラがモーセの律法を朗読したという記事がネヘミヤ記にありますので、大体そのくらいだろうという推測であります。次に閉じられた部分が、預言者の部分でありまして、紀元前二〇〇年であろうと考えられています。これは旧約聖書の続編にシラ書という文書がありますが、そこにほぼ現在と同じ数の預言者の名前が列挙されていて、その成立が大体紀元前190年頃であるからです。

さて、ここからがやや複雑と言えれば複雑ですが、非常に面白いと言えれば面白いわけです。というのは、今、私どもが翻訳で手にしている旧約聖書が最終的に確定し閉じられたのは、それよりももっと時間が経ちまして、新約聖書の時代に入ってからかです。しかも、大体、新約聖書の諸文書も成立した、ほぼ成立しつつあった、そのような時期に、つまり紀元後100年ぐらいに、旧約本文の標準化がなされました。ここで諸書の部分も確定をされて、これでタナックが成立したと歴史的に言えます。これはほぼ、研究者の間でのコンセンサスがあるところではないかと思えます。

なぜ、このことを最初に述べたかと言いますと、実は「旧約聖書の原典をたずねて」の「原典」というのは、この紀元後の100年ごろに標準化され確定した本文、これがいわゆる「正典化された」時点でのオリジナルテキストであり、その「原典」をたずねるといふことだと考えたからです。それになるべく近づいていく、「たずねて」というのは、そういった意味があるのではないかと思ひ、あえて少し歴史的なことを最初に申し上げました。このことは後に本文批評ということをお話するときにもう一度より厳密に述べたいと思ひます。

ところで先程、旧約聖書はヘブライ語で書かれているというふうに言いましたが、それは不正確でありまして、もう一つの言語「アラム語」も使われております。アラム語というのは、ペルシャ時代からギリシア時代にかけて、たいへん汎用性と言ひますか、多く用いられた言葉でありまして、当然、新約聖書の人々はほぼアラム語を話していたと言ひてよろしいかと思ひます。そのアラム語で書いた部分は、ダニエル書の2章4節の後半以下と、大きなところでは

エズラ記四章から六章、そして七章の部分は、これはヘブライ語で書かれた本文の文脈ではペルシャ時代にエズラに宛てられたアルタクセルクセス王からの親書となっていてアラム語で書かれています。この当時のアラム語はもちろん、ヘブライ語から派生した言葉でありますけども、違った文法を持ち、単語もかなり違っているのです。そういった言葉で、つまり、二つの言語で書かれているのが旧約聖書です。そのほか、エレミヤ書とか創世記には若干アラム語が見られますが（エレミヤ書10章11節、創世記31章47節など）、ほとんど、この講演においては説明を省略していい長さであります。

アラム語の部分の多くはダニエル書とエズラ記に集中していますから、大体、成立年代が遅いと言いますか、そういった時期の文章にアラム語が使われていることは、自然の流れではないかと思えます。このように、二つの言語で書かれている書物でありますけど、あとで申し上げますように、ある必要からギリシア語に全体が訳し始められます。これが「七十人訳聖書」です。大体、歴史的な位置は、紀元前3-2世紀の前後です。ヘブライ語聖書がギリシア語に翻訳をされた。このギリシア語訳聖書の順番は、現在の私たちが持っている旧約聖書の文書の順番と大体同じです。いやむしろ逆に七十人訳聖書に準じて、特にキリスト教会での旧約諸文書の順番が決められているのです。これが私たちの持っている旧約聖書の構成基準であると言って良いだろうと思えます。

例えば、歴代誌とかエズラ記、ネヘミヤ記などが、列王記の後に置かれたり、あるいは、私どもの聖書でエレミヤ書のあとに哀歌がありますが、これは、もともとは預言者の部分と諸書の部分に分かれていたものが結びつけられた例です。また、エゼキエル書とダニエル書も本来は違う部分に分類されていましたが、連続して配置されています。七十人訳聖書は、概して、歴史あるいは救済の歴史に即する仕方でも多くの諸文書を配列しており、その聖書を使ったのが初代の教会です。そして、それがキリスト教会の伝統となり、新約聖書の付いた旧約聖書は、この七十人訳聖書の順番に並べられている、そういった事情になっております。

さて、ここで「I.旧約聖書の三分区」の話を終え、本題の「旧約聖書の原典」

を探る部分に入ります。

Ⅱ. 「旧約聖書には原典がない」

「旧約聖書には原典が存在しない」、これは実際のことです。では、原典がないにもかかわらず、なぜこうやって翻訳されているのか？ それが最大の疑問と言え、疑問なわけであり、原典をオリジナルテキスト、最初のテキストとするならば、それは失われております。偶然に、今後、考古学的発見で、それが出てくる可能性は100パーセントないとは言いきれませんが、まずないと思います。

では例えば現在の新共同訳聖書は、それでは何を訳しているのかと言うならば、BHSと普通呼ばれる「ビブリア ヘブライカ シュトゥットガルテンシア (BIBLIA HEBRAICA STUTTGARTENSIA)」という校訂本です。さまざまな研究を踏まえて、ヘブライ語原典を現在活字化して出版をしているということであり、1967年から1977年まで10年間にわたりまして、このバーハーエス (BHS) というヘブライ語聖書の編集がなされました。これを基にして、現在の新共同訳聖書は翻訳されています。

さて、ではこういう活字化された近代のヘブライ語原典は、何に基づいているかと言いますと、それは『レニングラード本』と呼ばれる手書きの写本の一つです。このレニングラード本、略号を「L」と言います。正式には「コーデックス レニングラードンシス (Codex Leningradensis)」ですが、1008年のという奥付がある、中世の真っ只中の写本です。これが現在全部揃っている、つまり旧約聖書諸文書が全部揃っている写本としては最古のものです。ですから、これを用いて翻訳がなされているという事情になっております。

では、これよりもっと古い、そしてよりオリジナルテキストに近いと思われる写本はないのかと言いますと、もちろんあります。断片的に言いますとかなりあるわけですが、比較的纏まったものとしては、土地の名前をとってアレツポ本、あるいは『アレツポ写本』と呼ばれるものがあります。これは1008年よりもう少し前の写本でして、915年ぐらいに写本されたとされています。それが

残っております。ただ、これは全体の四分の三、旧約聖書の四分の三ですので、これをもってこのタナックを翻訳ということは、やはりできないわけでありませう。しかし、レニングラード本よりも古いものでありますので、今、ヘブライ大学が大プロジェクトを立ち上げまして、このアレppo写本に基づいて、それを校訂いたしまして、研究ないし聖書を読むことに資するという作業を試みております。

これは「ザ・ヒブル・ユニバーシティ・バイブル (The Hebrew University Bible)」というふうに言われていますが、最初にイザヤ書の部分が出版されました。1995年のことです。

それは一番上にヘブライ語の原文でありまして、その下にいろいろと細かな注があります。ヘブライ語の原文の一つ下には、ギリシア語を中心とした違った読み方と注が書いてあります。またそのもう一つ下には、後で述べる「クムラン写本」との異同を示す注があります。そして三番目には中世の写本との違いとか、そういったものがあって、最後に最も小さく書いてあるのは、スペルとかアクセントについての注です。このくらい丁寧な作業が現在行われています。実は私が入手しているのは、アレppo本に基づいたものとしては、イザヤ書とエレミヤ書だけです。ほかの文書も今後出版されていくのだと思います。こういった作業をヘブライ大学がやっているのです。これはある人の報告がありますが、「アレppo本に基づく校訂本はいつ出来上がるのですか？」と聞くと、「それは祈るばかりです」と言っている。つまり、これだけ厳密にやりますと、かなりの時間がかかるということだと思います。

実に、涙ぐましい努力をしている。なぜそこまでののか、と思いますが、それがまさに「原典をたずねる」ということなのです。われわれは日本語で旧約聖書を読めますので、その点では非常に読みやすいわけですが、その背後に、ヘブライ語からの翻訳だけではなくて、ヘブライ語原典そのものの問題というのがあるということです。そのことを具体的に知るということは、大切なことだと思います。

さて、1008年ないし915年のものが最古だといたしますと、旧約聖書の本文が

標準化されてから約一千年間の空白があるわけであり、もちろん断片的なものは残されていますが、まとまったものはほとんどない。では、その間のものはどうなったかと言いますと、聖書は写本すればいいというものではなくて、写本したものは読まれます。読まれて摩滅して薄くなっていくわけです。そうしたら、それはゲニザという廃棄する一歩手前のところですが、そこに保管され、そのあとは廃棄された。もっとも聖なるものですから、なかなか廃棄はいたしません。そういったような形で使い切ったものは公式には使わないので、しばらくゲニザに置かれます。そして歴史に埋もれていってしまったということでもあります。たまたまゲニザにあった写本が何かの偶然で発見されるということもあります。カイロ・ゲニザというのがいちばん有名ですが、そういった摩滅して読めなくなる寸前ぐらいのものが見つかって、それが研究対象になることがあります。それ以外のものはない。そうしますと、千年間、写されてきた、手で写されて残されたものが、現在、写本という形で残されているのです。

それは手で写していきますから、人間のやることであり、間違いが多いのではないか。あるいは、写本家が写本に、いろいろな書き込みをするということもあったのではないか。当然そのように予想されてきました。第二次大戦前、つまり1945年以前は、そういう疑いというものが非常に深かったわけです。しかし、この千年間の写字生、つまり写本する人々の仕事がものすごく正確だったということが証明されました。それが、ご承知の方も多いと思いますが、1947年以降発見された「死海写本」によって明らかになったことでもあります。偶然見つかったものでありますが、その後の発掘で第1洞穴から第11洞穴まであり、実に様々な文書が発見されてきました。

その第1洞穴にイザヤ書の写本がほぼ完全な形で残されていました。それを「1Q Isaiah a」と表記します。「1」というのは第1洞穴の「1」で、「Q」というのはクムランのQです。また、最後の「a」は、最初に発見された「a写本」という意味です（後述のように「b写本」というものもあります）。この「a写本」は巻物として素焼きの壺に納められていて、たいへん保存状態が良い。そ

れを、伝えられてきたこの本文と比較して読みますと、驚くべきほど一致していたということなのです。ですから、最初は偽物じゃないかというふうにさえいわれていたわけですが、実際にいろいろな研究からも紀元前3世紀から紀元後1世紀の写本ということが現在わかっています。

それはやはりビジュアルに見ていただかないと実感がわかないと思いますが、現在はその写真と、その筆記体の文字を活字化したものが並行して見られるように、一冊の本になって出版されています。聖書協会の聖書図書館には必ずあると思いますので、興味のある方は見ていただくとよいと思います。

私はこのイザヤ書の写本を、もちろん写真に撮ったものでありますが、いつも書斎の机のそばに置いております。まさに座右の書でありますけれど、これを見るのが楽しみなのです。なぜかと言うと、これはたぶん紀元前後のものだろうと思いますが、そうしますと、ナザレのイエスが読んだ旧約聖書も正にこのようなものだったと思うと、どきどきするわけです。しばしずっと、何時間でも書斎に籠っていて飽きないというか、そういった楽しみであります。左側のページが写真で、右側はそれを活字化したものになっています。

これが本文批評学上、非常に革命的な発見とされておりまして。さらに詳しいことを言いますと、今「a」というふうに言ったのですが、「イザヤb写本」というのもありまして、ある本にはその写真が載っております。それはイザヤ書断片ではありますが、非常に参考になります。学者はこの「イザヤb写本」の方が、「マソラ本文」(注記:「マソラ」というのは「伝承」という意味。また、そのヘブライ語の写本を伝承してきている人たちをマソラ学者と言う)により近いと判断しています。つまり、一挙に一千年間の空白を埋める世紀の大発見であったと言ってよいと思います。

この考古学的発見によって、千年間の写本家たちの仕事というのが非常に正確であったということがわかったのです。例えば、どういうことをしていたかと言いますと、正確に写本するために、いろいろなマークとか印をつける。例えば、何々書は合計何字からなっているかと数える。数えますと間違いが少なくなります。あるいは、この書物の中心、中心というのは内容的な中心ではな

くて、本当に、最初からと最後から数えていってその中心に位置する言葉は大きく書くとか、いろいろなことをいたしまして、聖なる書物、神の言葉が記された書物でありますから、可能なかぎり正確に書き写すという努力をしてきたのです。その労苦の結果、われわれは聖書を読むことができるようになっていくということでもあります。そして、それは一瞬も途切れたことがない。これは非常に重要なことです。古代の文献はいろいろあります。古代オリエントの文献などがそうです。でもそれは考古学的な発見で、ぼんと出てくるわけですから断絶があるわけですが、聖書の写本というのは、連綿とユダヤ教の写字生つまり写本家たちによって一瞬の断絶もなく伝えられてきた。そういうことは、ですから、一般の古代文献とはまったく違う性格を持つと、客観的にも言うてよいと思います。もちろん、聖書を神の言葉として読むというのは、ユダヤ教、キリスト教の信仰的立場であります。しかし、客観的に言いましても、一般の古代文献とは性格が違うということが言えるのではないかと思います。

さて、「死海写本」は大発見になりましたが、戦前からいろいろ検討されてきて、本文批評上、重要でありましたのが、先ほど言いました「七十人訳聖書」というギリシア語訳であります。この七十人訳聖書は、紀元前の3世紀半頃埃ジプトのアレキサンドリアにおいて翻訳され始め、最初はモーセ五書、つまり律法だけが翻訳され、そのあと現在の旧約聖書、そして、それよりも範囲が広いヘブライ語文書がギリシア語に翻訳され、それが、もちろん最初は手書きでありますけれども、やはり写本という形で伝えられてきています。新約聖書には旧約聖書がたいへん多く引用されていますが、そのほとんどと言ってもよいと思いますが、それは七十人訳聖書に基づいた翻訳であります。パウロなどは七十人訳聖書をももちろん読んでいたでしょうし、また福音書と使徒言行録を書いたルカも七十人訳聖書を用いていたと考えられております。

タナックがヘブライ語からギリシア語に翻訳された。「なぜ翻訳されたか」ということに関しては、これはいくつか理由が考えられます。しかし、最大の理由は、七十人訳聖書の歴史的な位置を考えるとかなり明白です。つまり紀元前の三、四世紀、あるいは二世紀、いろいろなところにユダヤ人が離散していま

した。この場合は、エジプトのアレキサンドリアが中心でありますけども、そうしますと、ヘブライ語が読めないユダヤ教の人たちが出てくる、その必要上、ヘブライ語をギリシア語に翻訳をして、そして信仰の学びと養いにした、それが一番大きな理由だと思われまます。紀元前の一世紀までには、大体完成していたと考えられております。この七十人訳聖書は、ですから、もちろん重要なわけでありまして、紀元後100年頃にヘブライ語の原典が標準化される、その200年ぐらい前の翻訳でありますから、非常にオリジナルテキストを回復するうえでは重要な翻訳になるわけです。

七十人訳聖書は、ですから「死海写本」と並んで本文批評学上、非常に重要なものとされてきております。この七十人訳聖書は死海写本と一致するような読み方を伝えているものがあります。そのことが重要となるのは、とりわけ現在の、例えば1008年のマソラの本文とは違っている場合です。つまり、次のような想定が成り立つわけです。たとえマソラの読みとは違っていても、七十人訳はマソラが標準化される前でありますので、それはあえてヘブライ語本文を変えたというのではなくて、違ったヘブライ語の写本の伝統があったのだらうと、推測されるわけです。ですから、このギリシア語訳というのは非常に重要なのです。やや複雑な過程かもしれませんが、そのことがヘブライ語原典をさぐる上では非常に興味深いことです。

先ほど述べたように、紀元100年ごろまでにヘブライ語本文は大体、標準化されたと考えられますが、それまではですからヘブライ語本文は多様で流動的であった。そこで、いろいろな流れの写本がありまして、それがクムランに表れたり、ギリシア語の元の底本であったりするわけです。そうしますと、七十人訳聖書がたいへんに重要だという意味は、以下の二つの点においてであります。

第一に、七十人訳聖書は、現存のマソラ本文よりも優れた（より原典に近い）読みを示していると判断されることがある、といこと。「優れた」というのは、より原典に近いという意味です。なぜならば、例えば1008年の「L」というレニングラード本は千年隔たっているからです。ギリシア語訳聖書は、標準化される200年くらい前のものですから、より原典に近い可能性があるというふうに

判断されることがあります。これが一つの理由です。

第二には、翻訳であるので、ヘブライ語本文の意味がより明確に推測できることがある、ということ。これも結構重要なことですが、例えば英語の翻訳などをされている方がここにいらっしゃったら、正に実感ではないかと思います。翻訳というのは意味を汲んで翻訳をしますので、ヘブライ語の本文がそもそも非常に意味の取りにくい場合、こういう意味であろうと判断して翻訳をしているギリシア語訳は非常に参考となるのです。つまり、ヘブライ語のもともとの本文の意味の推定に大変役立つわけです。

そのような二つの意味で、七十人訳聖書は重要な役割をもち、本文批評学上位置づけられていると言えます。

Ⅲ. 「本文批評」の方法

さて、ここまでほとんど説明なしにきてしまったので、ちょっと聞きづらかったかもしれませんが、「本文批評」というのは何なのかということです。本文批評というのは、その目的は何かと言うと、紀元後100年ごろに標準化されたと思われるマソラ本文の原典を想定しつつ、なお、それ以前の写本、翻訳を考慮にいれ、いわゆるオリジナルテキストを探求する、いや、それをでき得る限り回復することである、と言えるでしょう。もちろん100%回復することは難しいので、でき得るかぎりにおいて、その文書が最終的に成立し、確定された時点でのテキストを回復する。それが本文批評学と呼ばれる学問であります。ですから、この学問は非常に重要でありまして、聖書に基づくというふうに簡単に言いますが、聖書の本文それ自身が写本によって伝えられているわけでありまして、そのテキストがしっかりしていなかったら、「聖書に基づいて」とは言えないわけでありまして、本文批評学は最も基本的な学問であると言ってよいだろうと思います。

そこで、本文批評というのは何をするかということで、少し実際にちょっと疑似体験をやってみたいと思います。例えば、レニングラード本があります。この1008年の写本から、現在だと、活字化されたヘブライ語本文に直していく

わけですが、そのときに、やはり最もオリジナルテキストに近い形で本文を提示したい。これがもちろん校訂という仕事をする人々の願いであります。そこで本文批評学ということが、こんなことをしているのだということを、いくつかの例を挙げて説明したと思います。

すでに述べましたように、マソラ本文の伝承がかなり正確であったことは証明されていますが、しかし、誤りも当然あるわけでありまして、では、それをどういうふうに見つけるか、またどういう判定基準で、それを実際に行うかということなのです。

- 1) 第一に、「単一書写」ということです。「Haplographie (ハプログラフィ)」と言います。例えば次のようなヘブライ語の文章があったとします。

GFEDC EDC BA

これは、変なABCになっていますが、ヘブライ語は右から左に書きますので、まず**BA**という単語があって、**EDC**という単語があって、その次に**GFEDC**という単語があったとします。それで、**BA**はもちろん正確に写して、そして、**EDC**までいくのですが、ふっと目が先にいってしまって、この**EDC**が重なっているので、**BA**と書いたあと、**GFEDC**と書いてしまう。つまり、確実にもともとの写本にあった**EDC**を書き落としてしまうということなのです。

GFEDC EDC BA ⇒ GFEDC BA

これはわれわれもよくすることです。ほかの人の文章を写すのに、ふっと目が横にいってしまう分けですね。それはあるわけで、これを単一書写、つまりHaplographieと言い、**EDC**という単語を回復するべきだということになります。

- 2) また書き落とすのではなくて、逆に二回書いてしまう。**CBA**と書いて、ふと右側に目がいってしまって、もう一度**CBA**という単語を書いてしまう。これを「Rittographie (リトグラフィ)」、日本語では「二重書写」と言います。

CBA CBA

つまり、本来はない単語をもう一度二重に書いてしまう。この場合には、一つは本来なかったという判断になります。このようなことはいくらかもあると言うと少し語弊がありますが、確かに本文批評をしていると出てまいります。

- 3) この程度ならまだ異同は軽微なのですが、日本語では「同末誤写」と訳されている「Homoioteleuton (ホモイオテレットン)」という現象がありますが、この場合にはかなりの変化になる場合があります。これはきちんと正確に言いますとこうなります。「近くにある二つの文章の末尾に同じ、もしくはよく似た単語や文字が存在するときに、うっかりその途中を全部とばしてしまうこと」。基本的にはHaplographieと同じなのですが、それが一つの単語ではなくて、かなりの文章を飛ばしてしまう、ということもあり得るということです。具体的な例であろうと推定される（もしかしたらそうではないのかもしれませんが）、サムエル記上14章41節で、サウルとヨナタンが出てくるところであります。以下が新共同訳聖書の翻訳であります（日本語だけ）。

「サウルはイスラエルの神、主に願った (israel)。……………
……………(israel)『くじによってお示してください。』くじは
ヨナタンとサウルに当たり、兵士は免れた。」

このときに、同末誤写というのがあったとすると、「サウルはイスラエルの神、主に願った」という言葉のヘブライ語の最後の言葉は「イシュラエル」つまり「イスラエル」という言葉なので、恐らく次のような文書があったにも関わらず、それをうっかり飛ばしてしまったことになります。本文批評学的にそのように判断して、翻訳したのが口語訳です。口語訳聖書では次のようになっています。同じサムエル記上14章41節です。

「そこでサウルは言った、『イスラエルの神、主よ、あなたはきょう、なにゆえしもべに答えられなかったのですか。もしこの罪がわたしにあるか、またはわたしの子ヨナタンにあるのでしたら、イスラエルの神、主よ、ウリムをお与えください。しかし、もしこの罪が、あなたの民イスラエルに

あるのであれば (israel)、トンミムをお与えください。こうしてヨナタンとサウルとが、くじに当たり、民はのがれた。」

この「あなたの民イスラエルにあるのであれば」とう文章のいちばん最後にも、イシュラエル (israel) という言葉がありまして、そのためになかなか長い文章を飛ばしてしまったのではないかと推定するという立場があるわけですね。イスラエルという同じ単語があつて、どういう事情かわかりませんが、うかつにもこんなに文章を抜かしてしまった。もしかしたら、そうではないのかもしれないのですが、これが本文批評学上問題となるのは、七十人訳聖書の存在です。七十人訳聖書には、口語訳聖書で訳されているような文章があるのです。

『NRSV (New Revised Standard Version)』という英語訳の聖書では、もちろんこの部分を訳しています。口語訳もそれと同様に訳しているのですが、他方、新共同訳聖書はなるべく「L」、つまりレニングラード本に即して、密着して訳すということなので、判断としては、「同末誤写」という現象はなかったという見解です。新共同訳聖書では「あなたはきょう、なにゆえしもべに答えられなかったのですか。もしこの罪が…」云々という文章は全部ありません。こんなに文章が抜けているのかと、びっくりされる方もいるかも知れません。しかし、こういうことをいろいろやるのが、本文批評であります。

- 4) 「難しい読み lectio difficilior」。これはどういうことかと言うと、非常に意味が分かりにくい読みと、分かりやすい読みがあつたら、どちらが良い本文かという問題です。意味が取りやすい、そういうものと、意味が取りにくいもの、どっちが良い本文かと言うと、これは意味の分かりにくいほうが良いテキストであると判断します。なぜでしょうか。人間の心理として、分かりにくいものを分かりやすくしたいという心理が普通の場合働きますから、逆に言えば、分かりにくいほうがオリジナルに近いということになるわけです。

ただ、これも絶対的なものではなくて、文章とか単語が破損してしまつて

いる場合には、この原則は適用できません。いくら難しいほうがいいと言っても、壊れているテキストの方を取るかと言えば、そんなことはできないわけです。ですからこれも一つの原則に過ぎないわけです。しかし、意味の分かりにくい方が良い本文、良い写本だとそういうことで、それを本文として採用するという原則であります。

- 5) さらに「短い方の読み *lectio brevior*」。これはこういうことです。短い本文と長い本文がある個所で、どちらを取るかというと、短い本文を取るので。なぜかと言うと、人間は、やはり書き加えたくなるのです。そういう心理がある。例えば、写本家がその文章の内容に非常に感動してしまい、自分の文章を入れてしまうということもあり得るわけでありまして。そこで、短い本文を採用してそれを読むのです。ですから、これにもちろん限界があつて、長いほうが正しいかも知れないわけで、いろいろな判断の基準を設けて、オリジナルなテキストに一步でも半歩でも近づいていこうという、これもまた涙ぐましい努力を本文批評家たちはしているわけでありまして。

さて、そういったいろいろな現象とか原則というものがあるのですが、「判定の仕方」はやはり学者によって違います。ただし、例えばBHSに基づいて新共同訳聖書が訳されましたが、その旧約の部門の責任者の一人であった私の恩師でもある左近淑先生は、口が酸っぱくなるほど、「マソラ本文を尊重しなさい」と言われていました。神学校の授業のことで言えば、原典講読の時間に毎回のように言っていたのは「マソラ本文、マソラ本文」「それに忠実であれ」ということでした。具体的に言いますと「L」つまり「レニングラード本」に忠実であれということ。決して安易にそれを変えてはいけないということです。これはできる限り忠実にヘブライ語テキストを「神の言葉」として写し続けてきたマソラ学者の仕事への尊敬というものが言わしめていたことだと思いません。

しかし、やはり本文批評学上、十分な根拠があり、同時に根拠だけでなく、古代訳にサポートがある場合は別であるとも左近先生は言われていました。例えばギリシア語訳の「七十人訳」とか「死海写本」とか、その他、「タルグム」

(アラム語訳)「ペシッタ」(シリア語訳)「ウルガタ」(ラテン語訳)「コプト語訳」「エチオピア語訳」等々、古代訳というのは無数にあるわけです。もちろん七十人訳以外は断片的なわけですが、このような古代の翻訳に支持がある場合、やっとそこでこの原典はマソラとは違っていただであろうと推定をして、変更を加える。そのくらいマソラ本文に忠実に訳すべきだという立場です。新共同訳の旧約聖書は基本的にはそういう立場で翻訳されたのだらうと思います。そうでありますので、「レニングラード本」に基づくBHSというのを徹底的に吟味し検討するということが、やはり次の翻訳の場合も出発点ではないかと思えます。少なくともその土台の上に、新しい翻訳が考えられるのだと思えます。

しかし、ここで一つの典型的な例として、内容的にも面白いと思いましたので、マソラ本文の読みとは違う可能性を秘めた例としてイザヤ書の52章13節から53章12節のいわゆる「苦難の僕の歌」を取り上げたいと思えます。これは知っておられる方の多いところではないかと考えます。イエス・キリストの預言をしたとされている個所であります。この「苦難の僕の歌」には本文批評学上、六カ所ぐらい問題があるのですが、その一つが11節であります。その日本語訳をここに並べました。あともう一つ英語の訳も付け加えました。これを読んでみたいと思えます。まず、最初に口語訳は以下ようになっており、それ以外の該当箇所の翻訳を列挙します。53章11節です。そのなかの「彼」とは苦難の僕のことです。

口語訳「彼は自分の魂の苦しみにより光を見て満足する。」

新共同訳聖書「彼は自らの苦しみの実りを見 それを知って満足する。」

関根正雄訳「その生命の苦しみ故に彼は光を見て満ちたりる。」

中澤洽樹訳「その生命の苦しみのうちに、彼は（光を）見、義とする者を知つ

て満足する。』

関根清三訳「その生命の艱難辛苦の後、彼は見るだろう。彼は知ることで満足するであろう。」

左近淑訳「自分は命の苦しみにあふれ、苦勞に埋もれながら・・・」

NRSV訳「Out of his anguish he shall see light.」

フランシスコ会訳「彼は自らの辛苦を抜け出て光を見、その悟りによって満足する。」

左近先生の訳はやや意識的であります。また、先ほど言いました、英語圏での汎用性といいますか、非常によく使われている『NRSV (New Revised Standard Version)』では「Out of his anguish he shall see light」と訳されています。さらに、カトリックのフランシスコ会訳では「彼は自らの辛苦を抜け出て光を見、その悟りによって満足する。」と訳されています。実にいろいろな訳があるわけです。原文はほぼ同じです。一点を除いて同じなのですが、これだけ多様な訳が可能なのです。これらの翻訳文はすべて公に出版されているものですから、きちんとある個人が責任を持って翻訳をしているか、あるいは、聖書協会やフランシスコ会の聖書研究所という団体が責任を持っている訳なので、どれも無視できないと思います。

ではなぜ、こういう多様性があるかと言いますと、マソラの本文、とりあえず、ここでは「L」つまりレニングラード本ですが、それとは違った読みをする「異読」があるということに起因しております。「L」のマソラ本文には「彼は見るであろう」という目的語を伴わない文章が記されております。例えば、なかなかこれは手書きですから読みにくいわけではありますが、確かに「彼は見る」としか書いてなくて、「光」という言葉はないのです。しかし、『死海写本』

の「IQ Isaiah a」というのには、ちゃんと「光」という目的語が書いてあります。またこれは断片なのですが、幸い、「b写本」にもこの箇所があり、「光を見る」とあり、問題の「光」という言葉が記されております。そして、七十人訳にも「光」という言葉があります。これはギリシア語をお読みにされる方は、探そうと思えば探せるはずであります。53章11節というところで「光」というギリシア語がそこに記されております。

ですから、非常に有力な古代訳にそれがあり、しかもマソラ本文は「彼は見る」という非常に不安定な構文の文章でありますから、これをどう判断するかということが重要になるわけです。新共同訳聖書はマソラの本文に忠実でありましたので、「光」という言葉がないとして訳されている。「彼は自らの苦しみの実りを見 それを知って満足する。」ちょっと前後の言葉と文脈を勘案して「実り」という語が出てきていますが、本来は「見る」の目的語はないのです。しかし、口語訳聖書は「彼は自分の魂の苦しみにより光を見て満足する」と「光」という言葉を訳している。現在も、それが聖書協会から出版されています。ですから聖書協会は、この点については両方出していて、バランスが取れているといか、曖昧さを残しているということになります。

ですから問題は、これをどう考えるかということです。これは私の今の見解ですので、変わり得るわけですが、もちろん新共同訳聖書の訳をした先生方の見識というのは尊重しつつも、やはり、ここにマソラ本文が何らかの写本上の偶然か、あるいは神学的な理由によって変更された可能性がある、そしてその可能性は高いと言えるのではないかと考えます。従って「光」という目的語が存在するのがオリジナルテキストに近く、それを生かした翻訳が望まれる。これは、現在、私が勉強したかぎりでの見解ですので、また変わる可能性ももちろんありますが、例えば、1988年に翻訳された『The New International Version』はこう訳しています。“he will see the light of life and be satisfied”つまり、the light という言葉を訳しているわけです。これはかなり違います。こんなふうに非常に有名な個所であっても違いがあると、やはり他の個所にもそういったことがあるのではないかとということが当然推測されるわけです。聖書協会は新共

同訳の次に翻訳を企画されていると聞いていますが、今度はここに「光」があるのか、またないのか、これは私にとっては非常に重要な問題でありまして、イザヤ書を少し勉強してきた者にとって、学術的な興味でもあります。どうなるのでしょうか。

さて、ここまでお話ししてきて、ぎりぎり、大体、紀元後100年ごろのオリジナルに近いテキストを確定して、そして、それを日本語に訳すわけですから大変な作業です。ヘブライ語そのものを日本語に訳すのも、一つの文章をとってもやはり大変なわけですが、本文そのものの問題がありますので、今度、新しい翻訳をするということになれば、やはり、そのへんから、おそらく議論を始めるのではないかと思います。例えば「アレppo本」の問題などもあるわけでありまして、ヘブライ大学の先生たちは「祈るばかりです」と言っているわけですが、もちろん、祈りながら、次の日本語の旧約聖書の翻訳をどうするかということは、やはりわれわれの関心でもあるのではないかと。日本語として私たちは読んで、これで信仰を養ったり、あるいは聖書を学んだりするわけですので、単に学問上の問題、専門家だけの問題では決してないと思います。

最後に「旧約聖書の原典をたずねて」ということで、もう一言だけ申し上げたいと思います。本文批評学による基礎作業によって、その「たずねる旅」が終わると、いよいよそこから翻訳が始まります。しかし、翻訳にはやはり七十人訳がそうであったように、ある解釈がどうしても入ってきます。それは避けられないと思います。これは翻訳の宿命であります。直訳をいくらしても、やはり一つの翻訳にならないし、また意識しすぎると、これもまた問題になります。ですから、翻訳というのは結局「バランス感覚である」とある人が言いましたが、正にそうです。これは語学力を本当に身につけた上での話ですが、翻訳をもしするならば、最終的にはバランス感覚が重要です。日本語として現代の日本人の心に届き、同時にヘブライ語原典に可能な限り忠実な翻訳をすること、これを試みることは大いなる冒険であります。そして、そこにこれからの世代の日本人の心が聖書に対して開かれるかどうかの分岐点があると言っても過言ではないでしょう。

(注記：本稿は、2008年5月17日に日本聖書協会第24回聖書セミナーにおいて行った講演の要約である。講演の全文は他の三名の講演記録とともに一冊の書物として出版される予定である。)